

## 題と本文の間

——『古今和歌六帖』諸本の本文異同と『万葉集』——

福 田 智 子

一

『古今和歌六帖』諸本は、いずれも藤原定家所持本を源家長が書写・校合した本の系統であると考えられている。だが、詳しくみてみると、写本系と版本系に分けられるということが、夙に指摘されている<sup>①</sup>。確かに、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本（以下、桂宮本と略す）と寛文九年版本（寛文版本と略す）とを比べてみると、少なからぬ本文異同が指摘される。桂宮本と寛文版本に共通する歌は、四四六〇首弱あるが、そのうち約三割の一二七〇首余りの本文に異同が生じている<sup>②</sup>。

このうち、『万葉集』を出典とすると思われる歌は、約五六〇首ほどある。試みに、『新編国歌大観』所収の西本願寺本『万葉集』とこれらの歌の異同箇所を比較すると、『古今和歌六帖』寛文版本

と『万葉集』とで一致する例が、約七割と圧倒的に多い。一方、桂宮本が『万葉集』と一致するのは二割弱にとどまる。桂宮本よりも、寛文版本のほうが『万葉集』に一致する歌が多いというこの現象は、いったいどのように捉えられるべきであろうか。

そこで以下、『古今和歌六帖』の写本系本文と版本系本文の異同を、『万葉集』諸本を視野に入れ、さらに詳しく検討してみたい。具体的には、写本系本文として、桂宮本（本文を引用する場合、略称「桂宮」を用いる）の他、永青文庫蔵北岡文庫本（同「永青」）、内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本（同「和学」）、内閣文庫蔵林羅山旧蔵本（同「羅山」）の本文を参照し、桂宮本が固有にもつ、誤写などの本文の損傷をなるべく排除し、写本間で比較的安定した本文をもつ歌を、寛文版本（同「寛文」）と比較することにする。これらの伝本は、『図書寮叢刊』に載る『古今和歌六帖』諸本系統図を参考

に、なるべく本文系統に偏りのないよう選択した。それらの伝本を対象に、『古今和歌六帖』写本系本文と、寛文版本の本文との間で異同がある歌を、『校本萬葉集』を用いて、『万葉集』諸本本文と比較するという手順で考察していく。

二

まず、『古今和歌六帖』寛文版本が、『万葉集』諸本では異同のない、安定した本文に一致する例を挙げよう。次の(1)の例は、『万葉集』では一字一音で表記されており、その訓は、寛文版本の本文に完全に一致する。

(1) 『古今和歌六帖』第六帖、三六一九 題「なでしこ」

わかやとの なでしこの花 ちらめやは いやはつはなの 咲  
まさるとも 「桂宮」

我背子が 宿のなでしこ ちらめやも いや初花に 咲はます  
とも 「寛文」

○ 『万葉集』卷第二十、四四五〇(四四七四)

和我勢故我 夜度能奈弓之故 知良米也母 伊夜波都波奈尔  
佐伎波麻須等母

また、(2)の例は、「和学」「羅山」では歌が欠けているが、「桂宮」と「永青」は、共通した本文をもっており、「寛文」と対立し

ている。『万葉集』本文と一致するのは「寛文」である。

(2) 『古今和歌六帖』第五帖、二九九二

題「いへとじをおもふ」

あまくもの ゆきかへりくる われゆへに いゑにあるいもは  
ゑましくすやも 「桂宮」

あま雲の ゆきかへりなん 物ゆへに 思ひぞ我する 別れか  
なしみ 「寛文」

・歌欠「和学」「羅山」

○ 『万葉集』卷第十九、四二四二(四二六六)

大納言藤原家餞<sup>アノクモ</sup>之人唐使等<sup>ユキガヘリナム</sup>宴日歌一首即主人聊作之  
天雲乃<sup>アモクモ</sup> 去還奈牟<sup>モノノコエニ</sup> 毛能由患尔<sup>オモヒソノワガスル</sup> 念曾吾為流<sup>ワカチナシ</sup> 別悲美

次の(3) 『古今和歌六帖』二七九七番と(4) 三〇二三番は、写本と版本とで、結句に異同が生じている例である。

(3) 『古今和歌六帖』第五帖、二七九七

題「うちきてあへる」 やかもち

きみかいゑの かとたをみると いて、こし 心もしるく あ  
へる君かも 「桂宮」

・照月夜かも 「寛文」 下句欠「和学」

○ 『万葉集』卷第八、一五九六(二六〇〇)  
大伴宿祢家持到「娘子門」作歌一首

妹家之イモカイノ 門田乎見跡カドタクミムト 打出来之ウチイデコシ 情毛知久コロモシルク 照月夜鴨テルツキヨカモ

(4) 『古今和歌六帖』第五帖、三〇三三

題「くれとあはず」

むはたまの よは人むはかへる こよひさは われをかへすな

うちのたま姫「桂宮」

・道のなみちのながてを「寛文」

○『万葉集』卷第四、七八一（七八四）

（大伴宿禰家持更贈三紀女郎歌五首）

野干玉能ヌバタマノ 昨夜者令還ヨソバハカヘル 今夜左倍コヨヒサヘ 吾乎還莫ワレツカヘス 路之長手乎ミチノナガテ乎

(3) は、「寛文」では、結句が「照月夜かも」になっており、『万

葉集』も同様である。また、(4) では、写本系本文が結句を「う

ぢのたま姫」とするのに対し、「寛文」では「道のながてを」とな

っており、『万葉集』本文は「寛文」と一致する。

以上のような例からは、一見すると、版本のほうが写本系本文よ

りも整った本文であり、ひいては『古今和歌六帖』の本来の姿をと

どめていると、一見判断されそうである。だが、『古今和歌六帖』

本文のあり方は、それほど単純ではない。

三

『古今和歌六帖』の写本系本文と版本との間の異同が、『万葉集』

諸本間の異同に対応している例を挙げてみよう。

(5) 『古今和歌六帖』第二帖、一三四一 題「井」

おちたきつ はしり井の水 清ければ すて、はわれは さか

りかねてん「桂宮」

・わたくらくらくて「寛文」

○『万葉集』卷第七、一一二七（一一三一）

隕田寸津オチタギツ 走井水之ハシリキミヅノ 清有者キヨケレバ 度者吾者ワタスウレハ 去不勝可聞ユキカテヌカモ

〔校本萬葉集〕寛永版本「ワタラハ」

元暦校本・類聚古集・古葉略類聚鈔「癡」

元暦校本「すてらる」の右に緒「ステ、ハ」

古葉略類聚鈔「ステ、ハ」

(5) は、「寛文」では、第四句が「わたらでわれは」になっている。

写本系は動詞「捨つ」が用いられているのに対し、寛文版本では、

「渡る」という動詞である。この部分は、『校本萬葉集』では、底本

の寛永二十年版本でも、「度」の字に拠って「ワタラバ」という訓

が付されている。一方、元暦校本・類聚古集・古葉略類聚鈔といっ

た古写本では「癡」の字を用い、そのうち元暦校本・古葉略類聚鈔

には、「すてらる」「ステ、ハ」という訓が見られる。つまり、『古

今和歌六帖』の写本系本文にある「すて、は」という本文は、『万

葉集』のこれらの古写本と類似、あるいは一致すると見られるので

ある。

(6) 『古今和歌六帖』第五帖、三〇九五 題「わぎもこ」

しきたへの しらはまなみの よりかへに あらふるいもに

こりつ、そをる「桂宮」

たくひれの しらはま波の よりもあへす あらふる妹に 恋

つ、そをる「寛文」

○『万葉集』卷第十一、二八三二(二八三三)

栲嶺巾乃 白浜浪乃 不肯縁

恋乍曾居 一云、恋流已呂可母

荒振妹尔

〔校本萬葉集〕寛永版「ヨリモアヘス」。

金沢文庫本・西本願寺本、漢字の左に「ヨルカヘニ」。

また、(6)では、第四句は「よりがへに」という本文だが、「寛文」では「よりもあへず」になっている。この箇所は、『校本萬葉集』においては、底本の寛永二十年版本をはじめとして「ヨリモアヘズ」で、『古今和歌六帖』〔寛文〕と一致するが、写本系本文「よりがへに」に一字違いの訓「ヨルガヘニ」が、『万葉集』の金沢文庫本・西本願寺本に見出せる。この歌の場合も、『古今和歌六帖』の写本系本文が、まったく根拠のない、乱れた本文をとっているというわけではなく、このような古写本の書き入れにきわめて近い本文であるという点は、注意すべきであろう。

(7) 『古今和歌六帖』第五帖、三一六五 題「かみ」

ありつ、も 君をはまたん うちなひき わかくろかみに し

もはをきまよひ「桂宮」

・霜の置まてに「寛文」 霜はをきまとひ「和学」

○『万葉集』卷第二、八七(八七)

(磐姫皇后思三天皇御作歌四首)

在管裳 君乎者将待 打靡 吾黒髮尔 霜乃置万代日

〔校本萬葉集〕寛永版「シモノオクマテニ」。

金沢文庫本「しもおきまよひ」。神田本「シモノオキマヨ

ヒ」。

次の(7)では、結句の「しもはをきまよひ」について、「寛文」は、「霜の置まてに」という本文をとっている。この「寛文」の本文は、『万葉集』の寛永二十年版本と一致するが、一方、『古今和歌六帖』の写本系本文は、『万葉集』の金沢文庫本・神田本や、西本願寺本の貼紙別筆書き入れと、助詞一字の違いのみで酷似する。これらの例は、『古今和歌六帖』の写本系本文が乱れたものであるとは、必ずしも言い切れないことを示していると考えられる。古来、『古今和歌六帖』の本文は乱れていることが指摘され、桂宮本の第一帖の奥書にも、その旨記されているが、その乱れた写

本系本文の中にも、『万葉集』古写本に見られる本文が保存されている箇所を指摘することができる。

そうすると、その『万葉集』の比較的古い本文とは異なる本文をもっている、『古今和歌六帖』寛文版本は、後に校訂された可能性があると考えられるだろう。その作業は、寛文版本刊行に当たり、『古今和歌六帖』の本文を整える必要が生じた際のことであった可能性は少なくないであろう。とすれば、寛永二十年に刊行された『万葉集』の江戸期の流布本との校合をまず想定してみることも、あながち的外れではないように思われる。この『万葉集』寛永版本の刊行は、『古今和歌六帖』寛文版本（寛文九年刊）から四半世紀ほど遡る時期であった。

四

以上述べてきたように、写本系本文が『古今和歌六帖』の本来の姿をとどめ、寛文版本が後の校訂を経ている可能性は、次の用例にも見出される。すなわち、『古今和歌六帖』の写本系本文が、『万葉集』歌二首の歌句の組み合わせであるのに対し、寛文版本本文は『万葉集』歌一首と一致する例である。

- (8) 『古今和歌六帖』第三帖、一八四四 題「なのりそ」  
あつさゆみ ひきつのへなる なのりその いつれのうらの

あまかがるらん「桂宮」

・花ハナさくまてに あはぬ君ミコかも「寛文」

- 『万葉集』 卷第十、一九三〇（一九三四）

梓弓アツサユミ 引津辺ヒキツツノヘ有ナ 莫告藻ナノリソノガ之花ハナ咲及サクニ 不会君アハヌキミ詔ミコトノコト

- 『万葉集』 卷第七、一一六七（一一七一）

朝入アサリヌ為等ニ 磯尔イソノワガミ吾見ニ之ヲ 莫告藻ナノリソノガ乎ニ 誰嶋イシレシマ之ヲ 白水アマカカ郎カケル可カ将サツ尙シ

(8) では、「なのりそ」を詠んだ『万葉集』一九三〇番の上句と、『同』一一六七番の下句が組み合わせられたかたちである。これに対し、寛文版本は、『万葉集』一九三〇番にほぼ一致する歌句になっている。

また(9)は、『古今和歌六帖』写本系本文では、「しめ」を詠んだ『万葉集』四〇〇番の上句と、『同』一五一〇番の下句との組み合わせになっている一方、寛文版本は、『万葉集』四〇〇番の歌と一致する本文である。

- (9) 『古今和歌六帖』第五帖、二二六〇一 題「しめ」

するか

梅ウメのはな さきてちりぬと 人ヒトはいへと わかしめしの、花

ならめやも「桂宮」

・我ワしめゆひひし 枝エならめやも「寛文」

- 『万葉集』 卷第三、四〇〇（四〇三）

大伴宿祢駿河磨梅歌一首

梅花ウツクハ 開而落去登サキテツリヌト 人者雖ヒトハイヘド云 吾標結之ワガシメユヒシ 枝将有エダニアラメヤモ八方

○『万葉集』卷第八、一五一〇（一五一四）

大伴家持贈紀女郎歌一首

瞿麦者ウツクハ 咲而落去常サキテツリヌト 人者雖言ヒトハイヘド 吾標之野乃ワガシメノノ 花尔有目ハナニアラメヤモ八方

このような例は、『万葉集』のある特定の一首を載せる寛文版本の本文から、『万葉集』歌二首の歌の組み合わせ本文である写本系本文が生まれたと想定するよりは、むしろ、『万葉集』歌二首の歌の組み合わせ本文である写本系本文が、のちに、『万葉集』の特定の一首の歌の本文、すなわち、寛文版本の本文に校訂されたと見る方が自然であろう。

次の(10)に挙げた例からも、前節と同様のことが言えるだろう。

(10) 『古今和歌六帖』第六帖、四四二三 題「ほととぎす」

もの、ふの いはせのもりの ほととぎす いたくなきそ

我ワこひまさる「桂宮」

神カミなひの いはせの杜の 時鳥 ならしの岡に いつかきなか

ん「寛文」

○『万葉集』卷第八、一四七〇（一四七四）

刀理宣令歌一首

物部乃モノノツノ 石瀬之杜乃イハセノモリノ 霍公鳥ホトトギス 今毛鳴奴香イマモナカヌカ 山之常影尔ヤマノトカゲニ

題と本文の間

○『万葉集』卷第八、一四一九（一四二三）

鏡王女歌一首

神奈備乃カミナヒノ 伊波瀬乃杜之イハセノモリノ 喚子鳥ヨフコドリ 痛莫鳴イタクナナキツ 吾恋益ワガコヒマサシ

▽『万葉集』卷第八、一四六六（一四七〇）

志貴皇子御歌一首

神名火乃カミナヒノ 磐瀬乃杜之イハセノモリノ 霍公鳥ホトトギス 毛無乃岳尔ナラシノツノカニ 何時来将鳴イツカキナカム

(10)では、上句は『万葉集』一四七〇番に一致し、また下句は、『同』一四一九番に一致する。これらの万葉歌二首の歌句の組み合わせが、『古今和歌六帖』の写本系本文であるが、一方の寛文版本では、これら『万葉集』歌二首とは別の、『万葉集』一四七〇番の本文である。

この場合、写本系本文の上句の出典である『万葉集』一四七〇番は時鳥の歌であるが、下句の出典である『万葉集』一四一九番は、呼子鳥の歌である。『古今和歌六帖』では、ここは時鳥題であるから、呼子鳥の歌に校訂してしまうことは、もちろんできない。では、『万葉集』一四七〇番の時鳥の歌はというと、すでに、「時鳥」題の歌の中に配置されている。そこで、『万葉集』から、先の呼子鳥の歌に初句と第二句が一致する歌句をもつ、別の時鳥の歌、『万葉集』一四六六番を探して差し替えたと考えるのが、自然なのではないか。『古今和歌六帖』には、別々の二首の歌が組み合わせられた歌は、

他にも見出せる。写本系本文のみならず、版本本文にも、このかたちを保存している例は少なくない。そのような歌の一部が、寛文版本では、出典本文との間で校訂されたのではなからうか。

なお、一首の和歌が、写本系本文と版本系本文との間で、異なる歌題に配置されることもある。

(11) 『古今和歌六帖』第五帖、三二五一 題「桂宮」「たまくら」・「寛文」「まくら」

ゆひしひも とく日をとほみ しきたへの わかた枕に こけ  
をひにけり「桂宮」

ゆひしひも とく日をとほみ しきたへの 我こ枕に こけお  
ひにけり「寛文」

○『万葉集』卷第十一、二六三〇(二六三八)

結紐ムスビ 解日遠トキハトホ 敷細シキタヘ 吾木枕ワガモクシ 蘿生来コケムシ

(11) の場合、『古今和歌六帖』桂宮本では、「たまくら」題の歌、全八首中の七番目に配されている。一方、寛文版本では、「たまくら」題の直前にある「まくら」題、全十六首の末尾に位置しているのである。管見に拠れば、『古今和歌六帖』において、一首の歌が、写本系と版本系とで別の部立に配されている例は、今のところ他には見当たらない。

この歌が「たまくら」題に配されている写本系本文の存在は、第

四句を「我が手枕に」と認めていたことを示す。平安和歌に「木枕」という語はまず見られないという時代性を背景にすると、「木枕」と「手枕」との異同は、万葉歌が漢字表記から離れ、仮名で表記されるようになった時、「こ(己)」と「た(多)」との仮名字形が類似したことに起因した可能性が、まず想定されよう。それが後に、出典である『万葉集』の「我が木枕に」という本文に拠って校訂された結果、「たまくら」題に配することができなくなり、直前の「まくら」題の末尾に追加されたという手順は、いかにも想定し得るであろう。

## 五

このように考察してみると、『古今和歌六帖』寛文版本の本文が、出典である『万葉集』と一致するのは、必ずしも『古今和歌六帖』の本来の姿を保存するものではなく、後の校訂の結果である可能性が大きくなってくる。もっともこのことは、今から半世紀も前に、富永洋子氏によって示唆されたところであった。

……寛文版本は、それ以前の過程に於て、誰かの手によつて、意識的な校訂がなされたのではなからうか。昔から僻事の多いので有名な古今六帖を、少しでも元の形に戻す為、原典のわかつているものは、六帖の作者表記や歌の本文に関して、明らか

に間違っていると思われる箇所を、原典の方へ改めるという作業が行われたという可能性は十分に考えられよう。今後、寛文版本自体の性格や系統を考察していく場合、このことは、一つの問題点として、もつと検討を加えてみる必要があるのではないだろうか。<sup>⑥</sup>

従って、本稿におけるこれまでの考察は、実は、きわめて平凡な結論に帰着したに過ぎない。近年、版本文に『古今和歌六帖』の「古態」を見出す論も見えるようであるが、個々の用例の個別の事情を勘案しながらも、やはり、これまで述べてきた寛文版本の性格を基盤として考察していく必要があるように思われる。

『古今和歌六帖』の写本系本文には、明らかな誤写が少なからず見え、また、二首の歌が組み合わさってできた歌の中にも、意味の通らない本文もある。このため、『古今和歌六帖』の伝来の過程において、出典の歌集本文と校合することにより、『古今和歌六帖』本文を復元しようという意思も、おのずと生まれたことであろう。

また、現在においても、出典と思しき歌集の、現存する本文との比較検討によって、『古今和歌六帖』の本文の性格を考察しようとする。だが、そのようにして復元された本文が、そのまま『古今和歌六帖』の本来的な本文であると考えてよいのかといえ、そう判断するにはさらに一考を要するであろう。

たとえば、(2)『古今和歌六帖』二九二番は、そもそも、出典の歌本文が『古今和歌六帖』の題に合っていない例であった。すなわち、「いへとしをおもふ」という題に配置されているが、『万葉集』では、遣唐使の饞別の宴において詠まれた歌であり、『万葉集』では、遣唐使の饞別の宴において詠まれた歌であり、『万葉集』本文のままでは、『古今和歌六帖』の題に適わないと言つてよいだろう。つまり、『古今和歌六帖』の写本系本文では、下句に「いゑにあるいも」を詠み込むことで、題により即した歌になっているのである。

なお、(2)と同様のことが、(3)『古今和歌六帖』二七九七番にも当てはまるだろう。すなわち、「うちきてあへる」という『古今和歌六帖』の題を考慮すれば、「照る月夜かも」という結句に拠つて、恋人に逢えそうだという予感を表すよりも、「あへる君かも」とした方が、より歌題に添うことになる。<sup>⑨</sup>この視点に立てば、『万葉集』本文に一致する寛文版本は、『古今和歌六帖』独自の本文を、逆に損なっていることになるだろう。

また、類題和歌集としての『古今和歌六帖』の性格を考える時、出典の歌集に記される詠歌状況は必ずしも重要ではなく、むしろ、詠歌状況から歌を切り離し、詠歌の場によらない、独立した表現内容をもつ和歌を収集することが、類題歌集の編纂作業をおこなう上で、必要だったのではないかと考えられる例がある。(4)『古今和

歌六帖』三〇二三番は、写本系本文では結句が「うちのたま姫」に  
なっている。出典の『万葉集』では、大伴家持が紀郎女に贈った歌  
だが、ここは、『古今和歌六帖』写本系本文が、『万葉集』の詠歌状  
況から離れ、あらたに「うちのたま姫」の歌の世界を構築している  
ことになる。なお、一条兼良『歌林良材』巻下、六〇八番では、こ  
の『古今和歌六帖』の歌を、写本系本文「うちのたま姫」のかたち  
で、家持歌として載せている。『万葉集』諸本にこの本文を認める  
ことができないことから推すと、『古今和歌六帖』の十五世紀の享  
受のあり方を示す例と言えるだろう。

このように考えてみると、『古今和歌六帖』が、出典との本文異  
同を有していたとしても、まず、『古今和歌六帖』本文そのものを  
読み解いてみるべきだという至極当然のことを、ここでも再度確認  
することになる。(6)『古今和歌六帖』三〇九五番の下旬は、『万  
葉集』では、「アラブルイモニ コヒツツゾラル」で、『古今和歌六  
帖』寛文版本も同じ本文だが、写本系本文は「あらぶるいも  
に こりつつぞをる」になっている。「こひつつ」と「こりつつ」  
で一文字違いのわずかな本文異同ではあるが、写本系本文は「こり  
つつ」で異同はない。つまり、出典の『万葉集』とは異なる本文で、  
意味もがらりと変わってしまうが、「恋ふ」のではなく、「懲る」と  
いう写本系本文を、『古今和歌六帖』の本文としては、尊重するべ

きだろう。

さらに、(8)～(10)の『古今和歌六帖』歌は、写本系本文が  
『万葉集』歌二首の歌句の組み合わせになっているのに対し、寛文  
版本では、特定の一首の歌になっている例であった。(8)～(9)の  
歌の場合、写本系本文のもとである二首の歌は、両方とも『古今和  
歌六帖』の題に合うものであるから、あるいは、もともと『古今和  
歌六帖』には、この二首が並んで載っている段階があり、書写段階  
で誤って、二首の歌の歌句が混じり合い、一首になってしまったの  
かもしれない。

しかしながら、(10)の場合は、写本系本文のもとになった二首  
のうちの一首は「呼子鳥」の歌であり、『古今和歌六帖』の題「ほ  
ととぎす」に配置されていた段階があったとは、きわめて想定しに  
くい。「ほととぎす」の歌と「呼子鳥」の歌とが、「いはせのもり」  
という地名を媒介として組み合わせられた写本系本文は、きわめて類  
型的な和歌表現の世界を背景に生成されたものと見ることができ  
るだろう。このような視点に立てば、(8)～(9)の写本系本文につい  
ても、単に乱れた本文と捉えるだけではなく、表現の類型が生み出  
した新たな表現として、見直していく必要があるように思われる。  
そこに、『古今和歌六帖』の本来的本文の特色が浮かび上がって  
くるのではないだろうか。

類題和歌集において、和歌の表現や内容が題に適合しているか否かという点は、きわめて重要な問題である。すなわち、しかるべき題に配されるための表現や内容が、その和歌に認められねばならない。その要素が、現存する出典と思しき和歌本文には確認できない場合も、出典との異同箇所についてはやはり、題に適合した本文の方を『古今和歌六帖』本文としては、まず真とすべきであろう。

久保木哲夫氏は、類題和歌集について、以下のようなふたつの大分類を示された<sup>⑪</sup>。

①まず題が提示されて、その示された題によって歌を詠む「詠歌題」。

②まず歌があり、その歌を分類するにあたって施された「分類題」。

確かに、題を中心にして、それに编者や歌人がどう関わるかを捉えようとすれば、この二分類はきわめて妥当であろう。もっとも、编者や歌人の側から、歌といかに関わっていくかを考えた時、①の場合とはかく、②の場合には、さらに複雑な事情を考慮する余地がありそうに思われる。

いったん詠まれた和歌は、人々の手によって、時には表現や内容

をわずかに変えながら伝えられていく。この歌句の変化は、異伝として、ある種のマイナスイメージをもって受け取られる向きもあるけれども、この変化こそが、一首の和歌を生まれ変わらせ、新たに享受されていく力を生み出すこともある<sup>⑫</sup>。そのような状況を念頭に置く時、類題和歌集の编者が、表現変化に荷担しないとは、一概には言えないのではないだろうか。

もちろんその一方で、新沢典子氏によって指摘されたように、「古今六帖収載の万葉歌には、卷十二の歌に限って、……異伝注記のある歌が古今六帖に含まれる場合、すべて本文歌ではなく異伝歌が採られている<sup>⑬</sup>」という事実がある。現在確認することのできる『万葉集』諸本では異伝とされている本文が、『古今和歌六帖』の採歌対象とされる場合が存するということは、そこに「散逸歌集の本文」(同)を想定し得る可能性があろう。つまり、出典との間で異文が生じていたとしても、その歌が、『古今和歌六帖』に収められた当時、一般に流布していた可能性は、当然考慮されなければならぬ。

『古今和歌六帖』本文を考える時、编者が、出典本文に対してどの程度手を加えたのか、あるいは加えなかったのかはわからない。だがそれでも、编者も和歌伝承者の一員であり、かつ、おそらく歌人でもあつて、時として意識無意識に関わらず、表現のバリエーションを生み出す可能性をもつ存在であることを否定し去ることはで

きないであろう。そして、それ以上に重要なのは、和歌そのものが、表現の揺れを生むことによつて、さらなる表現の世界を構築する力をもっているということのように思われる。

そもそも、『古今和歌六帖』のような類題和歌集は、歌作りの手引き書という役割を担っている。歌を配列する段階でも、ある歌語がどのようなイメージをもち、どのように歌に詠まれ得るかという可能性を模索する余地は、多少なりともあつたと見るのが自然である。一方、現存する歌集の範囲内で、出典との間に、詠歌状況や和歌表現の違いがあつたとしても、一概に『古今和歌六帖』本文の杜撰さを指摘するのではなく、和歌自体に本来備わっている表現の流動性をまず重視したい。また、原則として詠歌状況を記さないという場を設定するということはすなわち、歌のみで表現世界を完結させなければならぬことになる。その条件下では、新たな表現も生まれてこよう。類題という場が、隣り合わせに配列された歌本文の、いわゆる「乱れ」を引き起こしやすかつたであろうことは、容易に想像できるが、しかし、その現象を、古来言われてきたような「乱れ」として捉えるだけではなく、既存の歌や歌語を用いた、新たな和歌表現誕生の場として捉え直すことも、あるいは必要なのではないだろうか。

契沖をはじめとする江戸期の国学者たちは、広範な知識を駆使し、

版本系本文を用いて『古今和歌六帖』歌の出典考証をおこない、本文異同を細かく指摘した。現代の『古今和歌六帖』研究は、そこから大きな恩恵を得ていると言えるだろう。しかし、その出典との本文の一致を、すべて『古今和歌六帖』の本文の正統性に結び付けるのではなく、類題和歌集としての『古今和歌六帖』特有の本文のあり方を、明確に認識しておく必要があるように思われる。

## 注

① 『図書叢義刊 古今和歌六帖』下巻、解題（昭和四十四年三月、養徳社）。

② 本行の本文異同のみを対象とした、意味に関わる語句の異なりをもつ歌の数を調査した。なお、明らかな脱字・衍字による異同は除外した。

③ すべてこの六帖いかにやらんいづれもくみなかくのみしとけなきものにて侍れば本のまゝにしるしをく。のちに見ん人心えさせ給へし。

④ 近年では、藤井翔太氏「『古今和歌六帖』の本文に関する一考察——出典歌集の配列との関わりから——」（『文化情報学』第六巻第一号、二〇一一年三月）といった論考がある。

⑤ この点については、すでに、中西進氏『古今六帖の万葉歌』（昭和三十九年六月、武蔵野書院）一〇七頁に指摘されている。

⑥ 『古今和歌六帖の研究——細川家永青文庫本及び松平文庫本を中心として——』（『国語と国文学』第四十二巻一、二号、昭和四十年一月）。

⑦ 古瀬雅義氏「清少納言の見た『古今和歌六帖』——黒川本・寛文九年版本は古態を伝えるものか——」（『中古文学会秋季大会、二〇〇九年一〇月』）。同氏は、『枕草子』本文から見る先行文学享受の有り様——清

少納言が見た『古今和歌六帖』（『古典籍研究ガイド』 王朝文学をよむために）、人間文化研究機構国文学研究資料館編、平成二十四年六月）においても、「寛文九年版本の祖本こそ、清少納言が枕草子を執筆していた平安時代の中ごろに見た『古今和歌六帖』であった」と述べている。

⑧ 前掲注④参照。

⑨ 青木太朗氏「『古今和歌六帖』における万葉集歌についての一考察——題との比較を通して——」（『笠間叢書』372『古筆と和歌』、平成二十年一月）では、この歌は、題にあわせた和歌本文の改変の可能性が指摘されている。

⑩ 『古今集』巻第十四恋歌四、六八九番歌、「さむしろに衣かたしきこひもや我をまつらむうちのはしひめ」の左注に「又は、うちのたまひめ」とあり、ここからの影響が想定し得る。

⑪ 「古今和歌六帖における重出の問題」（『中古文学』第九十号、平成二十四年十一月）。

⑫ 拙稿「平安朝和歌における『山』と『里』——『大原の山』から『大原の里』へ——」（『平安中期私家集論——歌人・伝本・表現——』（二〇〇七年二月、勉誠出版）所収。初出は、『語文研究』第七十七号、平成六年六月）においても、その一例に言及している。

⑬ 「古今和歌六帖と万葉集の異伝」（『日本文学』第五十七卷第一号、二〇〇八年一月）。

#### 附記

本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「文字列データ解析システムの構築と平安朝文学の伝本と表現に関する総合的研究」（課題番号22500236、平成二十二～二十四年度）における研究の一部であり、二〇一

〇年度中古文学会秋季大会において口頭発表した内容の骨子をまとめたものである。席上および発表後に、多くの方々から御教示いただいた。ここに厚く御礼申し上げる。